

巻頭言

教師の仕事

副教育長 上亟 啓介

「ままのみみやわらかくっていいきもちさわっているとねむくなるんだ（小1）」「おばあちゃん覚えているかな僕の名をもう一度だけ呼ばれたかった（中3）」

今年で創設二年目を迎えた「さいたま子ども短歌賞」応募作品の中から、印象に残った歌を紹介した。小学校1年生の何ともいえない素直な表現、そして中学校3年生が詠んだ祖母への思慕。どちらの歌にも、ほのぼのとした温かさを感じた。予備選考に入った316首全てに目をとおしたが、小学生の無邪気な表現から、中学生のときめきや恥じらい、決意や儂さの表現に成長が見て取れる。そして共通しているのは、どの歌にも透明感が感じられることである。

今の子どもは昔と違うといったことをよく耳にするが、本当にそうだろうか。これらの作品を目にすると、それは当てはまらない。子どもたちを取り巻く環境の変化など、様々な要因はあろうが、変わったのはあくまでも表層の部分であって、子どもの本質は今も昔も変わってはいない。

子どもたちが本来もっている、この変わらないよさを大切にし、いかに大きくはぐくむかが、私たち教師の仕事ではないだろうか。